慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『幼学国史五言詩』に関する覚書
Sub Title	Note on Ấu học quốc sử ngũ ngôn thi
Author	嶋尾, 稔(Shimao, Minoru)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.52 (2021. 3) ,p.153- 162
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000052-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『幼学国史五言詩』に関する覚書

嶋　尾　　稔

はじめに

『幼学国史五言詩』はベトナムにおいて漢文で記述された児童向けの国史教科書である。よく似た題の童学教科書に『幼学五言詩』があるが、別物であるので要注意である。『幼学五言詩』は中国の『状元詩』をベトナムに導入して別の題をつけたものであるが、『幼学国史五言詩』の方はベトナムの児童に自国史のアウトラインを教えるためにベトナムで作られたものである。ベトナム国家図書館に写本が一点蔵されている[i]ことが知られているだけであるので、一般に普及したものではないのかもしれないが、これまで私が検討してきたいくつかの児童向け歴史教科書［嶋尾　2012; 2013 ; 2016］とは様相を異にするものであり、ベトナムにおける歴史的知識の伝達の一様ではない展開を知るために有益なものと考えられるので、ここに紹介しておきたい。

漢文と字喃文で書かれた歴史教科書を網羅的に研究したグエン・ティ・フオン氏はこのテクストにも言及しており、その記述範囲（神話時代から西山朝まで）から編纂年代を阮朝初期（19世紀初頭）に遡らせる可能性を述べている［Nguễn 2013: 70-71］。しかし、その記述の仕方から見ると、植民地化以降に編纂されたものと見る方が蓋然性が高いと私は考える。この小文では、その点を検討し、漢文による歴史教科書編纂の末期に従来とは異なる特徴を持つテクストが出現したことを論じたい。

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 52 号（2021）pp.153~162

Ⅰ　テクストの概要

このテクストには作者についても作成年代についても記述が無い。最初の頁の中央に「幼学國史五言詩」、その左に「東威阮家蔵本」とあるのが唯一の書誌情報である。東威は地名と思われるが、その所在は不明である。その地の阮家の何者かが作成し、家伝の書としていたものが、何かの機会に外部に伝わったものであろう。

表題にあるとおり、漢字の五言句を連ねたものであるが、四句を一まとまりとし、各々の四句のまとまりの前に見出しと短い史実の解説（小字）を付している。記述は時系列に沿ったものであり、鴻厖氏紀から西山朝期までを取り扱っている。まず、四句セットの前に置かれた見出しを列挙し、その四句セットの内容を簡単に示して、このテクストの全体の構成を概観したい。見出しの前の番号は筆者が付したものである。

1　南邦起祖　「南人」たる「我越」の祖を涇陽王とする
2　龍泡（抱か）百卵　貉龍君と嫗姫が百卵を産んだとする伝説を採用する
3　雄王総咏　十八代続く雄王の時代は太古であるが、逸話が残るとする
4　扶董天王　雄王時代に外敵を倒した扶董天王の伝説に言及する
5　河上双仙　雄王時代の褚童子の伝説に言及する
6　媚娘帰傘　雄王時代の山精水精の伝説に言及する
7　安陽建国　安陽王とその都城コーロアの建設について述べる
8　趙武称帝　趙佗が南越を建て皇帝を称したことについて述べる
9　世子質漢　南越国の漢への包摂について述べる
10　徵王起義　漢の暴政に対する徵側徵貳の反乱（40-42年）について述べる
11　女王立国　徵王による六十余城の支配について述べる
12　九真女将　呉の支配期における趙嫗の地方反乱（248年）について述べる

13　朱鳶杜守　土着漢人家系から交州太守となった杜慧度の善政（411～420年）について述べる

14　前李南帝　李賁による自立（万春国）と陳霸先の侵攻（541～547年）について述べる

15　趙李分王　李賁の死後の趙越王と桃郎王の対立（548～570年）について述べる（中国側の資料にはない）

16　後李仏子　李仏子と趙越王の衝突、前者の勝利と隋への帰順（571～602年）について述べる（中国側の資料にはない）

17　驩枚黒帝　唐の安南都護府時代の梅（枚）叔鸞（梅黒帝）の地方反乱（722年）について述べる

18　唐林馮興　安南都護府時代の馮興（布蓋大王）の反乱（791年）について述べる

19　趙昌神夢　上記反乱鎮圧後安南都護として都城を増築した趙昌が、学問を修めて秦に仕え匈奴討伐の際に活躍したとされるベトナムの伝説的英雄李翁仲を夢に見たという伝承について述べる

20　曲節度　唐滅亡後の土豪曲氏の台頭について述べる

21　楊節度　曲氏を継いだ土豪楊廷藝が侵攻してきた南漢を破りハノイを回復したこと（931年）を述べる

22　前呉王　南漢を撃退した呉権がコーロアで王位に就いたこと（938～939年）を述べる

23　後呉晋王　呉昌文（南晋王）、呉昌岌（天策王）の統治（950～963）について述べる

24　十二使君　十二使君の地方割拠（963～967年）について述べる

25　丁先皇帝　丁部領による全国統一と皇帝即位（968年）について述べる

26　黎将伐丁　黎桓一代の支配をはさんで丁朝から李朝へ移行することについて述べる

27　李祖興王　李公蘊による王朝創設（1009年）と仏教尊崇について述べる

28　江神退虜　李仁宗期（在1072～ 1127年）の宋、占城、真臘の侵攻の撃退について述べる

29　李師伐宋　宋軍撃退（1075～ 77年）の際の李常傑の活躍について述べる

30　僧入王家　李神宗（在1127～ 37年）が仙僧徐道行の生まれ変わりであるという伝説について述べる

31　蘇尉輔高　後に陳藝宗によって高く評価され四輔図に描かれた高宗（在1175～ 1210）即位時の蘇憲誠の輔弼について述べる

32　女主禅陳　李朝最後の皇帝（年少の女帝）李昭皇の陳煚への禅位（1225年）について述べる。

33　東阿日出　陳朝の発展について述べる

34　六字題旗　元の最初の侵攻（1284～ 85年）を防いだ王族の陳国瓚について述べる

35　陳忠義王　上の戦闘で元に捕まったが投降しなった王族の陳平仲について述べる

36　三王破虜　元寇撃退（1288年）に活躍した王族陳光啓、陳慶餘、陳国峻（興道王）について述べる

37　圖賜季犛　陳朝末期の胡季犛の台頭（藝宗から四輔図を与えられた）と簒奪（1400年）について述べる。

38　後陳二帝　胡氏の簒奪を機に侵攻してきた明軍に対抗して陳朝復興を図った二帝について述べる。

39　否極泰来　胡氏の簒奪、明の残酷な支配という不幸のあとに独立の回復という新たな幸運が来ることを述べる

40　黎祖為王　黎利による起義と新王朝の創設（1428年）について述べる

41　聖母夢仙　天帝の申し子である黎聖宗（在1460～ 97年）がベトナムに最盛期をもたらしたことを述べる

42　猪王襲鬼　残虐な皇帝（威穆帝〈在1504～ 09年〉・襄翼帝〈在1509～ 16年〉）が続き黎朝が危機的状態になったことについて述べる

43　莫帥弄行　莫登庸の台頭と王朝簒奪（1527年）について述べる

44　阮祖扶黎　阮朝の祖先である阮淦らがラオスで黎朝の復興を目指したこと（1533年）、その後北部を鄭検が担当し阮潢がベトナム中部以南の統治を担当することになったことについて述べる

45　鄭太師　鄭氏と莫氏の百年を超える内戦について述べる

46　世尊中興　黎世宗（在1572～ 99年）期にハノイを回復した鄭松が王府を設立し鄭氏が実権を握った（特に17世紀後半鄭柞の時代に進展した）ことについて述べる

47　鄭立顕尊　鄭楹が懿宗に迫って顕宗に譲位するよう強いたこと（1740年）について述べる。

48　洞庭焚表　1778年の朝貢の際に鄭松が自らへの冊封を密に画策したが、表文を受けた正使の武陳紹が洞庭湖で表を焼き自殺して阻止したことについて述べる

49　阮公整　1786年に南に逃げた阮有整が西山勢力の北進の手引きをして鄭氏勢力を打倒したこと、その後西山勢力と離れて昭統帝を支援する立場を取ったことについて述べる。

50　虎視西山　1787－88年に西山勢力が二度目の北部侵攻を行うが、北部の人情の支持がいまだ得られないことを知って阮恵がフエにいったん戻ったことを述べる

51　女嫁西隣　1786年に黎朝の公主の玉欣を阮恵に嫁したことを述べる

52　炤統倚人　劣勢に立たされた昭統帝が1788年に清国に救援を求め住民の支持を失ったことについて述べる。

53　光中独立　1789年に清軍の北部ベトナム進駐に対して光中帝として即位した阮恵が清軍を駆逐して独立を回復したことを述べる

54　山河托意　意味を取りにくいところがあるが、とりあえず次のように解釈しておく。天下を誰が支配しようと、それを受容する悠久の山河の托意（国土の防衛であろう）を忘れてはならないことを述べて結ぶ

Ⅱ　記述内容の特徴

まず冒頭の四句セットに新しい地理的概念が盛り込まれていることは容易に見て取ることができる。

赤道赫炎方　南人亜種黄　誰為我越祖　首出是涇陽

後半二句に特に新しいところはない。前半二句の中の「赤道」「炎方」「亜種黄」は新しい概念であろう。「炎方」は南方の熱い地方を指す言葉として古くから使われているものであり、15世紀以来涇陽王の祖先が炎帝神農氏とされているのも同じ発想であろう。しかし、これが赤道と組み合わせられている点が新しい。赤道と言う言葉自体は古代の渾天説で天球上の太陽の通り道の意味で使用されているが、ここでは近代的な意味で地球の赤道を表している。四句セットの前に置かれた注には「亜州為黄人種、我国在亜州之南、赤道之北、帯温・帯熱之間、故其人色黄」とある。ベトナムはアジアの黄色人種の国であり、赤道の北の温帯と熱帯の間にあるという位置づけが冒頭に示されているわけである。このような地理認識はおそらく近代教育受容以後に成立したものであり、20世紀に入ってからのものではないかと推測される。

第二に、北河（ガン峠以北、17～18世紀に鄭氏政権の統治範囲）中心の記述であるということが挙げられる。南河（ガン峠以南、17～18世紀に阮氏政権の統治範囲）に言及しているのは、44と54だけであり、この二つも阮氏が南河を統治することになったという情報以外は記していない。作者が北河側の知識人であることは間違いあるまい。

第三に、ベトナムの外敵（特に中国）からの自立・独立という側面を強調する歴史教科書であるということが言える。扶董天王、褚童子などの外敵の侵略の撃退を助けた神話上の人物、北属期（漢から唐まで中華帝国の支配のもとにあった時期）に中国の支配に抵抗した徵側徵貳、趙嫗、李賁、梅（枚）叔鸞、馮興、安南都護に夢の中で土着の霊的威力を示した李翁仲、独立王朝期に中国王朝の侵攻を撃退した李常傑、陳朝王族、黎利、阮恵などの

記述が大きな割合を占めている。

いずれもベトナムのフォークロア的ヒーローして現在でも広く親しまれている存在であり、そのような民族英雄を集めた『越甸幽霊集』の歴史意識と相通じるものがあるように見える［陳・鄭・陳 1992］。しかし、この教科書と『越甸幽霊集』には大きな違いがある。後者が冒頭に置く士燮がこの教科書には出てこないのである。士燮は後漢末に交州太守となり後漢末から三国初期の中華帝国の混乱期に地域の平和を維持したために多くの知識人が移住して北部ベトナムが文化の中心地となった。士燮は祖先が王莽の時代に北部ベトナムに避難した土着漢人であるが、若いころに洛陽に遊学しており中華帝国の周辺にありながら帝国の中核とも関係の深い人物であった。北ベトナム一帯に自律的な勢力を維持した土着リーダーとして『大越史記全書』にも「士王紀」が立てられているのだが、この教科書はこの人物を採録していない。その代わりにこの教科書が交州太守の中から取り上げているは5世紀の杜慧度である。この人物も祖先が中国から移住した土着漢人であるが、中華帝国の中核との関係は記されておらずより土着性の強い一族と見られる[ii]。中国からの自立を強調するこの教科書により適合する人物を選んだものと考えられる。土着のリーダーの成長を重視する観点は、10世紀の独立形成過程の記述にもみられる。王を称した呉権や皇帝を称した丁部領に先立つ土豪曲氏の台頭に注目している点も意図的なものであろう[iii]。

ここで李賁（前李南帝）の記述（14）に注目しておきたい。

南国居南帝　天書早已排　万春初建李　附木日還帰[iv]

前の二句は李仁宗の時代に李常傑が宋軍と闘った際に神がお告げとして下したとされるよく知られた詩の内容を示したものである。いろいろなヴァリエーションがあるが、『大越史記全書』に掲載されているものは次のとおりである［陳 1984: 248-249; 嶋尾 2020: 235-236］。

南国山河南帝居　戴然分定在天書　如何逆虜来侵犯　汝等行看取敗居

この詩が何故李賁の箇所に出てくるかと言えば、この詩の中の南帝が李賁（前李南帝）と李仏子（後李南帝）を指していると考えられるからである。このお告げを下した神は李賁の後を継ぎ李仏子に敗れた趙光復の二人の名将張叫・張喝兄弟である。趙光復の敗北後、二人は李仏子から帰順を求められるが、拒絶し服毒自殺した。呉権の時代に神号が与えられ神祠が建てられている。『大越史記全書』ではこの詩のことは李賁、趙越王、李仏子の記述のなかでは触れられず、李仁宗期の記述の注のなかで伝説について付記するという形で扱われている。この教科書では、より古い時代（6世紀）の記述の中でこの詩に言及することで北属期に既に南国の独立性が明らかであったことを強調しようとしたのではあるまいか。さらに李仁宗期の宋との闘いの記述（28）の注において再びこの神のお告げである詩について説明し、南国の持続性という観念を児童に伝えようとしている。

第四に西山朝の評価の仕方が阮朝の標準的史観と異なる点が画期的である。阮朝の観点では、西山朝は正統の王朝ではなく「偽西」と記述される。この教科書でも、阮恵が最初に北部を攻めてきたときの記述（49）では「賊」とされるのであるが、ハノイに進駐してきた清軍を駆逐したときの記述は次のようである。

北援無堅塁　浮橋水断流　英雄能独立　公論在千秋

前の二句は清軍の敗走の様を述べたものである。後の二句では阮恵＝光中帝は独立を回復した英雄でありその名声は永遠であるとされる。従来の阮朝の西山評価とは正反対である[v]。西山朝の再評価は、20世紀初頭に在野で編まれた各種の通史に共通する課題であった。それらの通史の著者は北河の知識人であり、フエの公式史観への対抗的な歴史記述を志向した［嶋尾 2004］。この教科書もその潮流に棹差すものであろう。

おわりに

この教科書は植民地化以後に南国の独立性という植民地化以前から存在する考え方をより強力に展開したものであると私は考える。中国人支配者に過ぎないとみなされたのであろう士燮を除外し、阮朝の敵であった西山朝を中国からの独立回復と言う点で名誉回復することで、南国自律史観が純化されている。

実際に村々で使われた国史教科書は、19世紀以来の『初学問津』や『天南四字経』や『啓童説約』であって、この『初学国史五言詩』が普及した形跡は全くない。しかし、漢字漢文による教育の末期に、新しい国史意識を児童に伝えようとした知識人が存在したことは注目に値しよう。

注

i　デジタル化記号はnlvnpf-1031、所蔵記号はR.220。デジタル資料の配列には錯簡があるので注意が必要である。

ii　杜氏一族については［Taylor 1983: 109-115］参照。

iii　ベトナムの独立過程を曲氏の台頭から記述するのは現在の標準的なベトナム史の構成と同じである［山本　1975］。

iv　最後の句は、趙光復に与えられたとされる予言に基づく。この箇所の注がそれを野史から引いている。それによると、黒牛が白犢を生みその背中に「日附木来」とあり、果たして陳覇先がまた攻めてきた。日・附・木で陳を示しているということのようである。

v　西山朝のほかに簒奪王朝として正史では正統とされない王朝に胡朝と莫朝がある。この教科書では胡朝は「閏胡」と記され明示的に非正統扱いであるのに対して、莫朝の扱いは独特である。鄭氏と莫氏の闘いについて「莫来我兵回　莫帰我復来」と記述されており（45）、「我」に敵対する他者的存在と見なされている。

文献

Taylor, W.Kieith. 1983. *The Birth of Vietnam*. Berkeley: University of California Press.
Nguyễn Thị Hường. 2013. *NGHIÊN CỨU SÁCH DẠY LỊCH SỬ VIỆT NAM VIẾT BẰNG CHỮ*

HÁN VÀ CHỮ NÔM. Hà Nội: Nhà Xuất bản Thế giới.

嶋尾稔．2004.「20世紀初頭のベトナムの通史について」根本敬編『東南アジアにとって20世紀とは何か：ナショナリズムをめぐる思想状況』東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

嶋尾稔．2012.「ベトナム阮朝初期初学テクストの中の国土・国史：『啓童説約』の検討」山本正身編『アジアにおける「知の伝達」の伝統と系譜』東京：慶應義塾大学言語文化研究所.

嶋尾稔．2013.「『天南四字経』に関する覚書」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』44.

嶋尾稔．2016.「『初学問津』に関する覚書」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』47.

嶋尾稔．2020.「『大越史記捷録総序』注解Ⅰ」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』51.

陳慶浩・鄭阿財・陳義主編．1992.『越南漢文小説叢刊　第二輯　神話伝説類　粤甸幽霊集録・新訂較評越甸幽霊集・越甸幽霊集録全編・越甸幽霊簡本』台北：台湾学生書局.

陳荊和．1984.『校合本　大越史記全書　（上）』東京：東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター.

山本達郎編．1975.『ベトナム中国関係史』東京：山川出版社.